

Emergency Watch

No.62 Feb. 2016



【疾患頻度】	
1. 急性上気道炎・咽頭炎	: 861人
2. インフルエンザ	: 505人
3. 感染性胃腸炎	: 414人
4. 気管支炎	: 166人
5. 気管支喘息・喘息性気管支炎	: 136人



1月に入り、インフルエンザが流行してきました。今回の内容は、朝日新聞1月18日朝刊31面に掲載された「インフル予防 赤ちゃんは？」です。

インフルエンザは、せきやくしゃみ、会話で発生したしぶき（飛沫）に含まれるウイルスが、別の人の気道の粘膜に感染して発病する。国立感染症研究所によると、流行の時期は例年12月～翌3月ごろ。今年も、患者数は増えているという。

「有効な対策は人混みを避けること。でも、どうしても外出が必要な場合は、しぶきを意識して予防して」と、同研究所の感染症疫学センター第三室の多屋馨子室長は呼びかける。

会話やくしゃみで飛ぶしぶきの距離は、約1～2メートル。エレベーターや電車など、人との距離が近い場所では、ベビーカーの日よけをおろし、赤ちゃんにしぶきがかからないようにするのも対策の一つだ。

家庭でも、しぶきを意識した対応が必要だ。家族がインフルエンザにかかった場合は、室内でもマスクをつけ、赤ちゃんとは別室で休養させる方が望ましい。しぶきがついた可能性のある床やテーブルは、アルコールで拭くことで、何でも口に入れる赤ちゃんを感染から守れる可能性が高くなる。

母乳からは感染しないが、授乳時は顔の距離が近づくのでマスクが必要だという。

予防接種は、どうしたらいいのだろうか。

神戸大小児科特命教授の森岡一朗医師によると、生後6カ月までは妊娠中の予防接種が有効だという。インフルエンザウイルスを不活化したワクチンを妊婦が接種することで、抗体が胎盤を通じて赤ちゃんに伝わる。日本産科婦人科学会などが接種を呼びかけ、昨年の調査では妊婦の33%（赤すぐ総研調べ）が接種したという。

生後6カ月から赤ちゃんも予防接種を受けることができるが、抗体を作る機能が未熟で、大人ほどの効果は期待できないという。そのため、森岡医師は「家族が予防接種やマスクでしっかりと予防し、家のなかにウイルスを持ち込まないことが大切です」と話す。

万が一、赤ちゃんが感染した場合は、病状を観察することが大切だ。森岡医師は「基本は自宅でしっかりと休ませること。生後3カ月未満の発熱や、いつもと比べミルクが飲めなかったり、不機嫌になったりする場合は、病院を受診してほしい」と呼びかける。

厚労省の研究班によると、幼い子は感染をきっかけに脳機能が低下する「インフルエンザ脳症」を起こしやすいという。流行規模にもよるが、例年5歳未満の子どもを中心に100～200人が発症する。主な症状は意識障害やけいれん、異常行動など。発症した人の約8%が死亡し、20～30%にまひや障害などの神経後遺症があるという。

森岡医師は「赤ちゃんを守るためには、何よりも大人の気配りが大事。周りに小さな子どもがいない人も、マスクをしてワクチンを接種し、街中で感染を広げないためのエチケットが求められている」と話す。

■赤ちゃんをインフルエンザから守るために■

- ・人混みは避け、ベビーカーの日よけをおろす
- ・外出時はマスクをつける
- ・赤ちゃんが触るものはアルコールなどで消毒する
（家族が感染した場合は、しぶきが飛ぶ2メートルの範囲を特に念入りに）
- ・感染した家族は赤ちゃんとは別室で療養し、室内でもマスクをつける
- ・妊娠中にワクチンを接種する（生後6カ月ごろまで有効）